

羽毛製品は、冬の防寒着として定着しましたが、いまだに羽毛の膨らみがなくなった、羽毛が吹き出した、シミになったなど様々なトラブルが生じています。今回は、羽毛製品に特有の事故事例を紹介します。

監修／クリーニング総合研究所

素材
特性
に注意

衣類の状態

クリーニング後、後身頃一番上のキルティングの羽毛が中央に寄ったため、両肩付近の膨らみが少なく感じられるもの。

原因

キルティングで区切った容積に対して羽毛の量が少ないため、羽毛が自然に移動して寄ったもの。リュックなどの肩紐によって肩付近から中央に寄った可能性も推測される。

事故の防止対策

キルティングの容積に見合う十分な量の羽毛を充填すること。基本的にクリーニングの段階で防止する方法はない。

部分的な片寄りであれば、着用後に軽く叩くなどして羽毛を均等に広げること、簡易的に修正できる。

羽毛製品

ガチヨウやアヒルなどの水鳥から採取される羽毛には、ダウン（ワ



ダウンジャケット

再び多量の空気を含んで保温性も保たれる。

ダウン製品のクリーニング

羽毛自体はウエットクリーニング、ドライクリーニングどちらも可能だが、取扱表示、使用素材・生地加工、汚れの程度などを相対的に判断して、クリーニングの処理方法を決める必要がある。



羽毛が中央に寄ったため後身頃肩付近の膨らみがなくなり、羽毛が少なく感じられる

圧縮回復性

水鳥の胸の部分に生えているワタ羽のダウンは、タンポポの種子のような形状で、中央に核（元羽軸）を持ち、ここから放射状にしなやかな羽枝が伸び、さらにその左右に小羽枝が付いている。

羽毛の羽枝と小羽枝には、相互に絡み合わず反発しあう性質があり、よじれや型崩れを防止すると同時に、何回折り畳んでもすぐに元の形に戻る。その反発が瞬間的なため、かさ高性も直ちに回復し、

●ウエットクリーニングは、中性洗剤で押し洗いが基本で、脱水後は静止状態で乾燥し、羽毛をほぐすために温度を加えずに、タンブルをかける。

●ドライクリーニングは、取扱表示や素材・生地加工などを考慮し、使用する溶剤を選択することができるだけ短時間で処理を行い、タンブル乾燥をする。

前身頃の羽毛



後身頃の羽毛



羽毛の品質が異なっている可能性を考えて、肩付近の縫い目から後身頃と前身頃の羽毛を取り出し比較したが、形状や大きさなどに差は見られない

- 品 名…ダウンジャケット
- 素 材…表 地：ナイロン 100%
裏 地：ナイロン
中わた：ダウン 90%、フェザー 10%
- 取扱表示…
- 処理方法…ウエットクリーニング

●「衣料管理情報」は全ク連ホームページから PDF をダウンロードいただけます。
全ク連 HP <https://www.zenkuren.or.jp> 「お知らせ」→「衣料管理情報」